

2019年5月1日、平成～令和に改元され、NPO 法人民間稲作研究所も創設19年、20周年を真近に控え、新たな飛躍をめざして月1回のペースで通信を出すことにしました。日本の稲作を守る会、かみのかわ有機農業推進協議会とダブった内容になりますが、ご愛読のほどよろしくお願い致します。
NPO 法人民間稲作研究所 理事長 稲葉光國

気になる高校生の投書—遺伝子組み換え農産物の推進を主張—

例年よりも桜の花便りが早く届いたと思いきや、寒暖差の激しい毎日が続き、苗づくりに苦労するスタートでした。

下野新聞の読者登壇、10代の声欄に高校3年生の「遺伝子組み換え」推進すべきという意見が矢継ぎ早に掲載されました。4月6日「遺伝子組み換え実態を知り普及を」4月7日「遺伝子組み換え知識広めPRを」4月10日「遺伝子組み換え日本でも活用を」4月21日「メリットも多い遺伝子組み換え」という表題です。5月2日には「遺伝子組み換え安全保ち普及を」と題し、アフリカで進むプロサバナ計画を意識した意見が掲載されました。新学期が始まったばかりの時期に、学校で特別講義があったのか、あるいは3月の学期末に講義があったのか、関係者に尋ねてみたら副読本が県内の中学校・高等学校に無料で配布されたとのことでした。調べてみると日本モンサントが企画し、NPO法人企業教育研究会が製作し、NPO法人くらしとバイオプラザ21が監修した「農業を支えるバイオテクノロジー」というDVD付き、教材が無料で配布され、一部の学校で授業が行われたようです。教材をみると悪名高いモンサントが開発し、全世界に広めた除草剤耐性遺伝子組み換え大豆と害虫耐性トウモロコシが教材として取り上げられ、今までの品種改良の延長線上にある手法であり、農業生産を小力化し、収量も向上させる技術であると書かれています。

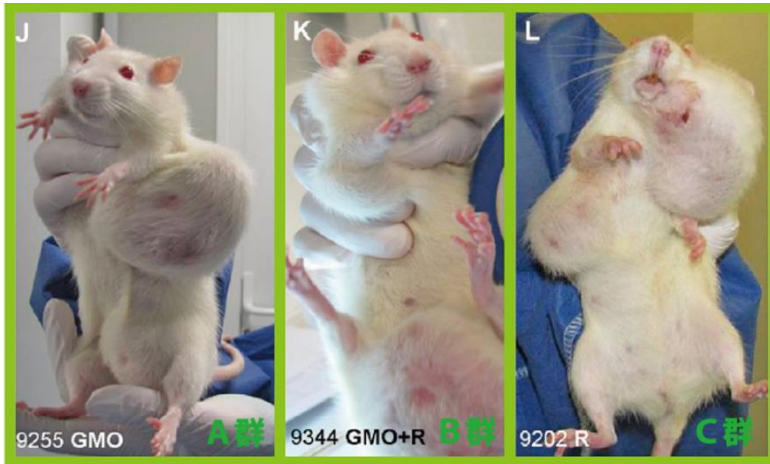


雑草で覆われほとんど育っていない大豆畑（有機栽培とは大違い）とラウンドアップを散布し、大豆以外の草が枯れた大豆畑の映像が写され、その効果の大きさが宣伝されています。



トラクターで中耕除草を1回だけ実施した麦跡（水田）の大豆畑、夏作物の中ではもっとも除草しやすい作物であり、一人で5haは栽培可能である。
(NPO 法人民間稲作研究所附属農場 2018年)

ラウンドアップに発癌性のあることがフランス・カーン大学のセラリーニ教授のトウモロコシを使った実験で明らかになってきました。(2012年9月) また、ロシアのイリーナ・エルマコヴァ博士のモンサントの遺伝子組み換え大豆(Mon40-3-2)によるマウスの実験では発育障害を引き起こすことが報告されてきました。(2006年1月)



A群:通常のラット用の餌に、遺伝子組み換え大豆の粉末を1日当たり5~7g混ぜて与えた。C群:通常のラット用の餌だけを与えた。(イリーナ・エルマコヴァ博士の実験)

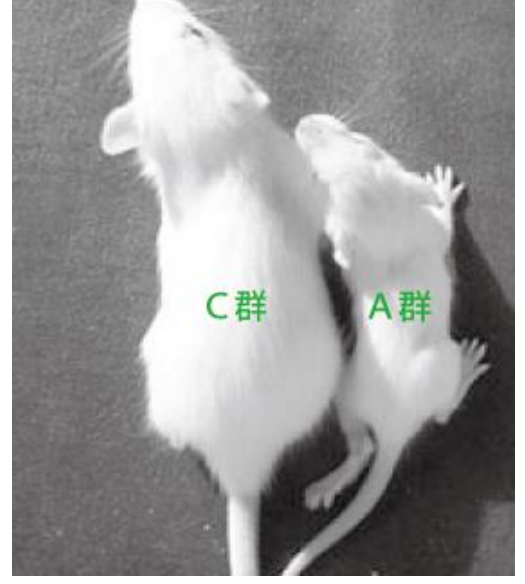


写真: Cnigen (遺伝子操作に関する独立情報研究機関) (フランス)。

頭と同じくらい巨大な腫瘍のできたネズミ。2012年9月、フランス、カーン大学のセラリーニ教授らの研究チームが発表した実験結果は、世界に衝撃を与えた。これは市場に広く出回っている除草剤耐性遺伝子組み換えトウモロコシ(NK603)をねずみに食べさせるというもので、実験に使われたねずみは全部で200匹。ねずみの寿命に相当する2年間の歳

極め付きはカリフォルニア州裁判所での判決です。最初に出たモンサントの有罪判決はカリフォルニア州の裁判所(第1審が2億8900万ドルの有罪判決、控訴審が7800万ドルの有罪判決。モンサントは控訴中)でした。2019年3月18日には、今度はカリフォルニア連邦裁判所陪審がモンサントのラウンドアップがガンを引き起こした可能性を認める評決を全員一致行ったとのこと。モンサント(現バイエル社)のラウンドアップに関連する訴訟は11,200を超したと言われており、今後も裁判が毎月のように続くこととなります。(「サルでもわかる遺伝子組み換え-安田美絵」,「2019, 3, 21印鑰智哉氏レポート」より)

こうした事実を中高校生には全く知らせず、一般にも報道すらしない日本のマスコミの姿勢は将来に禍根を残すことになりはしないか、冷静に判断してもらいたいものです。

周知のように大豆は日本を含む東アジアが原産地であり、空気中の窒素を大量に固定(2.4kg/10a)し、40%前後のタンパクを含む(魚肉類は18%前後)優れた食材です。日本人は納豆・豆腐・味噌・醤油の原料として毎日摂取しています。大豆を油の原料として消費している欧米人と比べ、その影響は計り知れません。この原料が遺伝子組み換えになりラウンドアップ(成分名グリホサート)を散布され、残留基準が大豆で2ppmから5ppm、小麦は5ppmから30ppmに大幅に緩和され(2017年12月)で輸入される事態が今後も続き、国内でも栽培が広がれば、2人に1人といわれる癌による死因はさらに増加し、弱年齢化は目に見えています。日本モンサントのロビー活動?で闇討ち的に進められてきている種子法廃止、遺伝子組み換えやゲノム編集などの規制緩和だけでなく、種苗法による自家採取禁止などの規制強化。農薬取締法の規制緩和によるジェネリック農薬(グリホサート)の販売促進、グリホサートの残留基準の緩和、そして中高等学校生徒への宣伝攻勢など、すべてモンサント(現バイエル社)の利益を確保するための施策です。世界の孤児となり、バイエル社に身売りしたモンサント社の社訓-儲けが全て-を日本で最大化し、アジア各国に売りまくって延命しようとする最後のあがきと思われます。

最後に、大豆はもっとも簡単に雑草防除が可能な夏作物で、2回の中耕除草を行えば後は拾い草で済む作物です。しかも大豆跡の畑では窒素要求度の高い冬作物の小麦が無肥料で栽培できるなど有機栽培に打って付けの作物です。子供たちのために小麦-大豆の有機輪作を普及し、自給運動を進めましょう。(稲葉記)